

連載 「変わりゆく高等教育」 第 3 回

悪魔か救世主か？

その 2：英語支配の終わりの始まり

a.k.a.ミンミン

はじめに：英語とは何なのか？

[『市民研通信』第 52 号「悪魔か救世主か？その 1：MOOC（ムーク）の出現」](#)でお誘いしたが、MOOC のコースは試していただけたでしょうか？ 未だの方はせっかくの機会なので、これを読み進める前にぜひ自分で興味を持てるコースを見つけていただき、どんなコースでもいいので試していただきたい。そうすることで、これからの日本の高等教育が直面する危機への洞察が別次元のものとなること必然である。しつこいが、知識はもはやコモディティであり、それ自体に何の価値もない。必要なのは自分で経験し、感じることである。

MOOC が与える日本の大学へのインパクトを考える前に、今回は多少回り道をしなければならない。それは学びの媒介として重要な「英語」とは何なのかを、あらためて考えることである。英語という言葉がどのような状況にあるのか、をよりよく理解することによって、日本の高等教育業界、また英語教育全般の今後の、全く違って見えてくることだろう。

ご承知の通り、第二次世界大戦はドイツ、イタリア、日本をはじめとする枢軸国の勝利に終わり、アメリカ合衆国は、東海岸はドイツによる統治、西海岸は日本の統治、ロッキー山脈地帯が緩衝地帯となっている。当然、東海岸ではドイツ語が支配者階層の言語であり、西海岸では日本語が支配者階層の言語となっていて、エリートになりたいアメリカ人の若者は、これらの言語を多くの金と時間をかけて習得しなければならない。

と書くと、きっと何かの間違いだろう、と読者はすぐに気がつくであろう。それとも筆者が妄想癖のある極右か何かなのではないかと。何のことはない。SF界の巨人、フィリップ・ディックが1962年に発表した「高い城の男 (The Man in the High Castel)」の設定である。このSF小説の中では第二次世界大戦で枢軸国が勝利し、アメリカ合衆国はドイツと日本に分割統治されている。そこでは「高い城の男」という謎の人物が書いた「いなご身重く横たわる」という小説が密かに流行していた。実は連合国が枢軸国に勝利していたのが真実であるという内容故に発禁本とされているのだが、一体何が真実なのかを確かめるために、その謎の人物に会いに旅をするアメリカ人女性を中心に物語が展開されていく。

歴史改変 SF なのだが、しかし、ここには人間が言葉を使い始めてから続いてきた真実は曲げられてはいないし、これはいくら SF 小説でも真実なので曲げようがない。それは単純に戦争に勝った側の言語が、負けた側の言語より優位になる、という真実である。程度の差はあれ、政治的に優位な方の言語が、劣位な方の言語に優先する。この例外を筆者は知らない。台湾やパラオの年寄りが日本語を話すのも、チュニジアやモロッコなどの北アフリカでのフランス語の使用も、南アメリカでのポルトガル語、スペイン語の使用も、もっと遡れば欧州の諸言語にラテン語が影響しているのも、みな同じ真実から来ている。そして昨今の日本における英語の使用も、同じ真実が作用しているだけである。

ところで、筆者は過去20年以上に渡り、日常的に様々なビジネスパーソンといろいろな意見を交換してきたが、誰一人として英語を必要とする人に会ったことはない。実は誰も英語なんて必要としていないのだ。英語が必要だなんて、ビジネスの世界を知らない役所や教員が自分たちの仕事を作る為、または意図的に特に米英の手先となって彼らの利益の為に、日本国民に真実を捻じ曲げて、必要だなんて言っているだけである。教育の成果を発揮すべき卒業後の世界（そのほとんどはビジネスだろう）、そして卒業生の活躍の為に国家が税金を投入している英語教育なんて、本当はビジネスの世界では必要としていないのである。

というと読者は混乱するだろうから、もう少し正確に書こう。学校を卒業したほとんどの人が入るビジネスの世界では、「英語そのもの」は必要としていないのである。「英語そのもの」を必要とするのは、英文学者とか言語学者、英語関係の役人や英語教師ぐらいのものだろう。ほとんど全ての人が必要とするのは、言語そのものでなく、それが作用した結果なのである。ビジネスであれば、英語でなく、英語を媒介としたビジネスを成立させることこそ重要なのだ。アカデミアでも同じだろう。話が通じればいいのである。恋人同士であれば気持ちを伝えること。英語は単に伝える手段にすぎない。

筆者はよく宅配ピザ屋に例える。ピザが話の内容。宅配バイクが言語という内容を届けるメディア。当然、ピザが旨いことが肝心だ。ピザが不味かったら売れないので、届ける必要もない。届けることをいくら上手くしても、ピザ本体が不味かったら本末転倒だ。そしてピザを届ける手段はなんでもいいのだ。多くはバイクだろうか。でもピザ屋の隣宅からのオーダーだったら歩いて届けるだろう。これからはドローンで届けるようになるかもしれない。自走ロボットでもいいだろう。確実に安全に早く届きさえすれば、届ける手段はなんでもいいのだ。ピザの旨さを追求せずに、宅配バイクの乗り方を追求している人がいたら、それは単に錯乱しているだけだが、英語となるとどうだろう。全く多くの若者が人生の貴重な時間を無駄にしているのがわかるだろう。

ここで質問。日本で生まれ育った日本人にとって、言語的に一番有利な世界はどんな風だろうか？少し想像してほしい。

そこで、何か特殊な道具を使って、英語をペラペラと話している日本人を想像した読者は、かわいそうだが、かなり米英に洗脳されている。(征服者側(日本に上陸してきた米および英連邦のことです。念の為)からすると良き非征服者(日本人のことです。念の為)であり、歴史観が欠如していて政治意識の低いかわいそうな日本人は、日本での英語関係の教育行政官や英語教師としては最適である。

日本人にとって言語的に一番有利な世界とは、日本が世界を全て征服し、人類の全てが共通言語として日本語を使わなければならない世界ではないか。日本人以外は、全て第二外国語として日本語を話してくれれば都合がいい。外国人が世界のどこであれ、生まれてからすぐ日本語で育っては、日本語が上手くなりすぎるので、長期的には日本人には都合が悪い。ローカルな言葉で生活してもらい、日本語は学校で教えられる。そうすると日本人が一番上手く言語を使えることになるし、日本人の使う日本語が唯一正統であり続けるし、日本人の日本語教師もどんどん養成して、世界中に送り込める。日本文化を世界中に浸透させて、世界中でビジネスを有利に進め、日本語の小説だってマンガだって億単位の部数で売ろう！ノーベル文学賞の選考委員が全員日本語で世界中の文学を読まなければならないようにしよう！

と書くと、ほとんど妄想狂のように感じるかもしれないが、日本を米英に置き換えてみればさほどクレージーなことを言っているのではないことがわかるだろう。このように現実のところ政治経済文化と言語は切っても切れない関係であるのだ。学校を終えたほとんどの人が入っていくビジネスの世界では、グローバルにビジネスを展開する必要があるならば、たまたま現在は圧倒的な勢力を誇る英語が必要になるだろうが、実はビジネスさえできれば、将来は中国語でも、他の何語でもいいのである。「英語」そのものではなく、その位置にある言語さえ習得できればいいのだ。そして、それが日本語であれば日本人にとっては都合がいいが、現実はそのようにはならないので、日本人は英語なり中国語なりの習得に、時間と金をつぎ込み続ける運命にある。しかし、

どう転んでも母語ではないので、いつまでも英語や中国語のネイティブより不利な位置にあることに変わりはない。

大学入試時や大学時代が英語力のピークだったという人は多いだろう。しかし、例えば共通テストの英語読解問題が日本語だとしたら、東大や京大の英語読解問題が日本語だとしたら、TOEIC の問題が日本語だとしたら、日能研に通っている小学 6 年生のふつうのレベルのクラスの子供でも、内容なんて完全に理解できるレベルの文章でしかないのだ。むしろ簡単すぎて、彼らはどこかにひっかけがあるのではないかと勘繰る位のレベルの低さだろう。われわれ日本人は、莫大な時間と金をつぎ込んで、日本語にすればぜいぜい小学生レベルの英語に消耗され続けてきたし、これからもそうなのだろうか？ その時間をどう埋め合わせればいいのか？われわれ日本人が英語の習得に消耗している間に、英語ネイティブは自分たちの母語で思考を深められるというのに、STEM (Science, Technology, Engineering and Mathematics) の勉強に全く多くの時間をかけられるというのに。歴史を学べるというのに。詩を楽しめるというのに。いくら敗戦国だとはいえ、これは日本人にとってはどんな分野にせよ国際的に活躍するためには圧倒的に不利な状況ではないか（同じことが、他のマイナーな言語を母語とする国全てに当てはまる）。ビジネスだけでなくアカデミアでも、特に言語依存度が高い人文系、社会科学系においては、圧倒的に不利である。

と書いていくと筆者は英語が出来ないように聞こえるかもしれないが、何十年も毎日のように英語ネイティブと英語で仕事をしてきた上で、このように言っているのである。ちなみに学生の頃は、大学入試で言うとどんな英語の試験も制限時間の半分程度で終えてほぼ正解、そして大学学部は英語日本語半々で勉強して、留学前の TOEFL でもほぼ満点、大学院からは全て英語で学んできた。社会に出てからは英語日本語半々で仕事をしてきた。しかし、それでも英語はなかなか苦手である。母語ではないからだ。出来れば出来るなりの、どうしても埋め合わせられない溝が見えてくるのだ。

進化する AI 翻訳の実力

そんな不利な日本人の状況を、有利な立場にある米英側が改善してくれるだろうか？ 日本人は英語で言いたいこと言えなさそうで不便だから、10 億ドル投資して自動翻訳装置を開発しよう、なんてトランプ大統領が言うだろうか？ 政治の面ではむしろ日本人を不利な状況のままにしておくのは当然だ。しかし、経済の面では儲ければ投資する米英企業はあるかもしれない。だが、例えば Google 翻訳の稚拙なレベルを見てもわかるように、本気で日本語—英語間の言語的な障壁を無くそうとしているなんて思えない。そのような意図があっても、商売の面からは話者の多い言語間、つまりスペイン語—英語間とか、中国語—英語間が優先されるだろう。

結局は不利な側が何とかしないとイケないのだ。そして幸いにも、ここにきて光明が見えてきた。ここではわれわれ日本人の未来を変えるだろうテクノロジーの例として、みらい翻訳を紹介する。

[みらい翻訳](#)とは、NTT ドコモや NTT コミュニケーションズ、パナソニック、翻訳専門会社である翻訳センターが 2014 年に設立した会社であるが、技術のコアの部分は [NICT \(国立研究開発法人情報通信研究機構\)](#) が 30 年も前から継続してきた研究成果に基づいている。[無料で使えるお試し翻訳](#) (と言っても日本語から英語の翻訳だと、日本語 2000 字までを一気に英訳できる) を筆者は実務でも用いている。自分でいちいち翻訳するよりも圧倒的にスピードが速いからである。日本語と英語で資料を作成せねばならない場合など、まずは日本語で資料を作成し、それを一気に英語に訳す、そして校正する、という作業手順で、実務の効率が大幅に上がっている。

お試し翻訳の画面は非常にシンプルに出来ている

とは言っても何がすごいかピンとこないだろうから、具体的な例を見てみよう。

以下の文章は、『市民研通信』第 52 号に掲載された[\[翻訳\]パーム油栽培の生物多様性に対する影響](#)の原文である [The impact of palm oil culture and biodiversity](#) の Level 1: Highlight の一番初めのセクションである。

原文：

1. How is palm oil produced and what is its importance?

Since the 1990s, palm oil has become a global commodity widely used in processed foods, mainly because of its high yield. It is produced from palm trees cultivated in western Africa and South and Central America, but the highest concentration of palm oil fields is in Indonesia and Malaysia, which

provide 85% of the world production. Small scale production actors in particular, which produce around 40% of global palm oil, are very important in the sector.

Fresh palm fruits are harvested and then crushed to extract the oil from the kernel and from the flesh of the fruit separately. The oil from the kernel is used mostly for soap and industrial purposes as well as for processed foods, while the oil from the fruit goes into food production. A palm oil plantation yields 3.8 tons of oil per hectare, compared to 0.8t for rapeseed oil, 0.7t for sunflower, and 0.5t for soy.

Almost 75% of the world production goes into food products, particularly cooking oil and processed oils and fats (e.g., margarine), but it is also used to produce biofuels.

この原文を市民研通信第 52 号に掲載された久保田・上田訳とみらい翻訳の AI 訳で比較してみよう。

1. パーム油はどのように製造され、その重要性は何か？

1990 年代以降、パーム油は、主にその高収量作物のために、加工食品に広く使用される世界的な商品となっている。それは西部アフリカと南・中央アメリカに生息するアブラヤシの木から生産されている。しかし現在、パーム油の最も高い生産地はインドネシアとマレーシアとなり、世界全体に 85%を提供している。特に世界全体のパーム油の約 40%を生産しているのが小規模生産者であることがこの業界では非常に重要なことである。

新鮮なヤシの実を収穫した後、粉碎して種子と果実の果肉から別々に油を抽出する。種子からの油は主に石鹼や工業用、加工食品用に使用され、果実からの油は食料生産に使用される。パーム油農園では、1 ヘクタールあたり 3.8 トンの油が取れる。ちなみに菜種油は 0.8 トン、ひまわりは 0.7 トン、大豆は 0.5 トンである。

世界の生産量のほぼ 75%が食料品、特に食用油や加工油脂（マーガリンなど）に使われているが、昨今ではバイオ燃料の生産にも使われている。

1. パーム油はどのように生産され、その重要性は何ですか？

1990 年以降、パーム油は主に高収率のために加工食品に広く使用される世界的な商品となった。西アフリカや中南米で栽培されるヤシの木から作られるが、パーム油の生産地が最も集中しているのはインドネシアとマレーシアで、世界生産の 85%を占める。特に、世界のパーム油の約 40%を生産する小規模生産主体は、この部門において非常に重要である。

新鮮なパームの果実を収穫し、粉碎して油を種子と果肉から別々に抽出する。核から出る油は主に石鹼や工業用、加工食品に使われ、果実から出る油は食品生産に使われる。パーム油のプランテーションでは、ヘクタール当たり 3.8 トンの油が産出される。これに対し、菜種油は 0.8 トン、ヒマワリは 0.7 トン、大豆は 0.5 トンである。

世界生産のほぼ 75%が食品、特に食用油と加工油脂(例えばマーガリン)に向けられているが、バイオ燃料の生産にも用いられている。

(翻訳時間：10 秒程度)

如何だろうか？ 細かい部分で AI 翻訳は誤解をしているかもしれないが筆者にはわからない。ただ全体的に言いたいことは AI 翻訳でも十分伝わってくる。実際、筆者はみらい翻訳がリリースされた時から使い続けているが、年々精度はもちろん、「こなれた」翻訳が出来るように進化しているのを感じており、この 4 月には、和文英訳がプロレベル、英文和訳が TOEIC960 点レベルのビジネスマンと同等にまで進化してきている。とはいっても TOEIC960 点レベルの根拠となっているのは、数少ないライティングサンプルなので宣伝の色合いが強いが、[ニュースリリース](#)の AI 訳と TOEIC 高得点者の訳、また翻訳のプロ訳の対比がなかなか面白いのでご覧いただきたい。つまり、みらい翻訳を使えば、専門知識はないかもしれないが、そしてもしかすると誤解をして訳しているかもしれないが、少なくとも TOEIC960 点の英語の得意な人に、24 時間なんでも翻訳を無料で頼めるという状況と同じになったのだ。しかも翻訳速度は人間の何百倍も速いし、人間と違って疲れなし、機嫌を取る必要も、酒を飲ませる必要もないのである。文学的な表現や口語的な表現、人間にしかわからない悪文などを除けば、厳密な正確性が問われなければ、既に翻訳は人間の行う仕事では無くなってきているのだ。そして AI の進化は始まったばかりで、こんなのはきっと序の口なのだろう。

機械通訳に関しては、ここからさらに入口の話し手の発声を聞きとるという作業や、話の流れから発語を類推するという作業などが必要になる。しかし出口の発語する方は機械的には既に簡単だろう。そして東京オリンピックを前に、いろいろな新製品が投入され、一般にも通訳機器がそれなりに使えるという認識が広まると予想している。

間違った日本の英語教育の方向性

教育機関向けの新製品・サービスの展示会である[学校・教育総合展\(EDIX\)](#)を冷やかに、先日東京ビックサイトまで行ってきた。入試で英語 4 技能が必要になるとあって、学校向けの AI 製品がいろいろ展示されていた。その中でも筆者が注目し、現物を見てみたい、と訪ねた会社に[株式会社サインウェーブ](#)というところがあった。子供向けの英語学習アプリを販売しているのが、筆者の注目製品は唯一つ、[英語手書き認識採点システム SiF](#)であった。[このビデオ](#)で紹介されているように、要は手書きの英作文をカメラで写し、それを機械が文字に起こし、校正、採点、講評を返してくれる、という仕組みである。

そして実はこのシステムは本年より導入される英検（読者も中高生のときに受けたであろうあの英検です）の AI 採点に導入されるのだ。そう、英検はもう AI が採点する時代なのだ。正確には中国の IT 企業の最大手の一つである iFlytek 社の技術が、日本のサインウェーブを通じて[英検の AI 自動採点に導入される](#)という訳だ。

しかし、筆者はこれを実際に見て、また展示場の他の会社の沢山の AI 英語学習支援システムを見て、非常に大きな違和感を覚えた。先に紹介したみらい翻訳のように、個々の能力を TOEIC960 点レベルまで即座に拡張できる AI テクノロジーが出てきている一方、なぜ子供たちには旧態依然として英語の学習を強制するのか、全く理解できないからである。ビジネスやアカデミアの世界では、AI テクノロジーを使った上で競争することが近い将来の必然であるのに (AI とまではいなくても、計算機なしで成立するビジネスや研究開発分野の方がすでに珍しいだろう)、子供たちには依然として自分の能力を生身の身体に閉じ込め、さらに AI テクノロジーを使って生身の身体を鍛えることを強要する。例えるなら、(ガンダムとか知らない人には申し訳ないが、つまりは人間の操縦するものすごく強いロボットです)、ロボットに乗って (つまりテクノロジーの使用を前提として) 争うことが基本となるビジネスやアカデミアという大人の戦場で、子供の学校では依然として生身の身体を鍛え、生身で (つまりテクノロジーの恩恵を全く無視して) 戦場に送りだそうとしているようにしか見えないのだ。しかし、どんなに体を鍛えても、誰が生身でロボットに勝てるだろうか。どんなに時間と金をかけても、子供たちの何パーセントが TOEIC960 レベルまで到達できるのだろうか? テクノロジーで個々の能力が即座に簡単に拡張でき、(ここが大事) その拡張した能力で即座に付加価値の高い学習活動や異文化体験が出来るのに、そのテクノロジーをむしろきわめて劣った生の身体の鍛錬の為に用いて生の身体で勝負させようという錯乱。いくら新しいテクノロジーに慣れていない過渡期だとはいえ、全く誤った方向だと感じている。GPS 誘導のミサイル相手に、体を鍛えて竹槍しかなくても崇高な精神力があれば勝てると思うくらい滑稽である。第二次大戦中にも似たような滑稽な考えをする人はいた。しかし現代の日本でも英語教育の現場ではさしたる疑問もなく、似たようなことが進行しているのだ。読者の中で小中高大の子供を持つ親は、子供の学校での英語学習は落第しない程度の付き合いで済ませて、それ以上は全く英語の勉強に時間も金も使わせない、という態度もありえるだろう。当然、巷の英会話学校なんて存在意義がなくなるので、この分野の会社の株を持っている読者は早く手放すのが安全だろう。

言語の障壁が取り払われると、どんな学びが可能になるのか? どんな高付加価値の学習活動や異文化体験が可能になるのか? そのイメージを共有するために読み進める前に以下のビデオを見ていただきたい。まずは子供の社会科の教室から。初めは何が起こっているかわからないかもしれないが、まあ最後まで見ていただきたい。2 分で未来の教室が少し見えてくる。筆者はこのビデオをいままで少なくとも 100 回は見て、この教室のイメージが身体に浸み込んでいる。

[Skype Translator preview opens the classroom to the world](#)

Skype の YouTube ビデオより 日本の授業で子供たちがこんな笑顔を見せることがあるのだろうか？

これはもう 4 年も前に出たビデオであるが (IT の世界では大昔だ)、Skype はスペイン語—英語間では無料で同時通訳サービスを提供している。もし、この子供たちがお互いの言葉を学ばなければならないとしたら、こんな簡単なやり取りでも、何百時間を投資しなければならないか想像してみたい。テクノロジーが即座に、あまり学習価値のない外国語の語彙や文法の習得 (= 暗記) にかかる時間と金と効率化して (個々の子供たちの投資時間の総和を考えれば、一クラスでの何万時間、何十万ドルになるだろう)、一気にお互いの現実の生活を尋ねあうという段階にいたっている。例えば日本の学校で、スペインのことを勉強しているときにはスペインの学校とつないで、アフリカのことを勉強しているときにはアフリカのどこかの学校とつないで、ビデオのように学ぶ部分があると、なんと楽しいではないか。そんなところに行ったことのないほとんどすべての日本人教師に教わるより、全くいい。子供の学ぶことへのモチベーションも大いに上がるだろう。向こうだって日本のことを知りたいはずだ。ニンジャなんてその辺に歩いていないことを伝えてやれ。夜 10 時まで塾に行っていて、夕飯はマックだって教えてやれ。その一方で日本人の教師や子供たちが日本のことをスペイン人やアフリカ人に教えればいい。

例えば日本の子供たちがスペインのことを学ぶ時には、自分たちでまずは調べさせて、まとめて、それからスペインにいる生徒や教師にプレゼンして、向こうからフィードバックをもらう、なんて面白いではないか。教科書に書いてあることなんて意味がない。自分たちで調べまとめて (英語では **Knowledge Making** なんて言うが)、発表して、現実になんのか相手からフィードバックをもらって、今度はこちらから教える、フィードバックする。社会科でありながら社会科以上のことができるのではないか (そして、実はこの授業の形態は彼らの将来の現実の働き方に類似することとなる。座って教師の話聞くなんて、将来の働き方の準備にはならないのである)。

外国語の語彙や文法（繰り返すが暗記）や簡単なやり取り（全て幼稚園・小学生レベルの会話）に多くの時間を取られる日本の学校の現実と、ビデオの内容のような楽しい活動と、政府自身が打ち出した大仰な外国語や社会科の学習目標をどちらが効果的・効率的に達成できるか、近づけるか、これは明白であろう。そしてこのような学びが普通になれば、そこには世界的なレベルでの教師の分配が問題になってくるだろう。例えば物流が既に世界レベルでの最も効率のよい船や航空機、倉庫の配置を常に考えているのに対し、義務教育の教員の配置は世界的に国ごとに閉じている。これが開放された時、学びに劇的な変化が訪れるのだ。優秀な日本の社会科の先生は、日本の子供たちを教えるだけでなく、世界の子供たちを相手に日本のことを教えてもいいではないか。そんなことが出来ないのは、学年で子供たちを分けているのと同じく、単なる大人の都合にすぎない。誰にとっても不幸だ。

では、本稿の主な対象である高等教育はどんな風になるのか想像を膨らませてみよう。そもそも高等教育は、今でも義務教育のように国レベルで閉じている必要は全くない。例えば7-8年前に流行ったハーバード自熱教室というのを覚えているだろうか。みなさまの放送局がハーバード大学のマイケル・サンデル教授の大教室での授業を放送したのであるが、（実はいまだに edX で受講することもできる。[Justice, Harvard University at edX](#)）当時見る機会がなかったり、見たけれども、どんな雰囲気か良く覚えていない人の為に、[このビデオ](#)を見てから、先を読んでほしい。4分少しある。



YouTube の edX HarvardX の Justice の授業風景 ここで日本語でも難しい意見を堂々と英語で述べられる日本の高校生はいるのだろうか？そこまで到達可能なのだろうか？万一、到達可能としてもそれは割にあう時間と金の投資なのだろうか？

ここでは例えば、船が遭難してこのままでは全員死ぬ、1 人を殺して食べれば何人かは生き延びられる。ここで誰かを犠牲にすることは許されるか？などなかなか深い議論をしているのであるが（ところで授業に出てくる学生たちは事前に、背景になる思想に関して膨大な量のリーディングを課せられていることを忘れてはいけない。ただ適当に自分の考えを話しているのではない）、あの教室の中に入って行って、堂々と自分の意見を述べられるだけの英語力を持つ日本人の大学生が一体日本には何人いるだろうか？どんな日本人が、英語ネイティブでも難解な哲学書を毎授業の度に 100 ページも読んで理解し、自分なりの意見を整理して英語で発信することが出来るだろうか？誰があそこで日本的な価値観を述べて、西洋的なものの見方に揺さぶりをかけられるだろうか？もちろん此处での話の流れから、それは帰国子女などではなく、小中学校から英語を学び始めた、そして英語で話すなんて学校の英語授業の時間くらいしかない、日本の普通の大学生に限定される。

そんなの全て日本語だって困難だろうが、それでも日本語であれば対応できる大学生は少なくはないだろう。というより今の能力で易々と出来ることなら大学でやる必要はない。困難なのは当たり前として、日本語であれば、ハーバードのあの大教室での議論に参加できる大学生は全く多くいるであろう。

何千時間も費やして、何百万円もつぎ込んで、それでもあんな教室の環境で英語ネイティブと英語で渡りあえるようになれる、という保証は何もないところで努力を強いられ続けるのが日本の大学生なのだろうか？そんな不利な状況を一気に改善して議論に飛び込んでいくことが、テクノロジーの進歩で可能になりつつあることは、英語教師や大学はむしろ隠しておきたい不都合な事実だと考えているのかもしれない。何しろ英語などで単位が取れなくなると、英語教師は食べっぱぐれるし、専門科目担当の教師は余計に教えることに時間を取られるだろうし、要は供給者側からすると、英語のように付加価値は低い簡単に時間数を消化でき、しかも教員は簡単に確保できる科目が少なくなると困るのである。

ところで英語を学ぶ必要に迫られてきたのは日本人だけではない。世界中の英語を母語としない人が同じような状況にあり、実は AI 通訳翻訳技術は世界の主要な国ではどこでも進められている。先にあげたみらい翻訳には最近になって欧州系の言語が追加された。もう少し簡易な [VoiceTra というスマホアプリ](#) ではアジアの言語も含めて既に 31 カ国語に対応している。興味ある読者はぜひ自分のスマホにダウンロードして試していただきたい。

いままで見てきたテクノロジーの発展は、単に世の中が便利になる、ということだけではない。これはつまり、戦勝国の主要な国々で使われてきた英語という言葉で支配されてきた世界が、テクノロジーの進歩によって終焉を迎えつつあることを意味する。明らかに力の優劣があった世界が、少なくとも言語的にはより平等になる。それが AI の進歩によって目前に迫ってきている。

みらい翻訳や VoiceTra を開発してきた NICT の研究者達がどんな世界を想像しているか、以下のビデオで彼らのビジョンを共有してほしい。13 分と冗長なドラマ仕立てになっているが、時間のある読者はぜひ見て欲しい。忙しい人は初めから 2:00 までと 10:00 以降でもいいだろう。実はこのビデオの主人公ミクさんのセリフの一言一言は練りに練られている。何年も言語について考え、また英語がある程度出来る人なら誰でもが抱くだろう悔しい思いをしてきた筆者としては、見るたびに涙が滲み出てくるほどに希望を抱かせてくれる。また NICT が国立の研究所であり、民間企業のように自社の製品をぶち上げている訳ではないことにも注目してほしい。むしろ控え目な内容だろう。そしてこのような未来が実現するかしないか、というのはもはや問題ではない。問題は、実現するのが「いつ」になるか、ということだけだ。

[Freeing the world of language barrier ~多言語音声翻訳が世界を繋ぐ~](#)

こんな世界で、それでも学校で子供のお遊びレベルの英語に時間も金もかけ続けるというのはどのような理由なのか、筆者には全く理解できない。筆者は日本の英語教育の拡大は失敗する、というより生徒・学生・親（少なくとも将来の知的な生産活動に向けて子供を教育しようとしている層には）に見向きもされなくなる、と信じている。法科大学院の失敗とは比べ物にならない規模の惨事となるだろう。法科学院に行くのはあくまで任意だが、英語学習の拡大は全ての子供への強制である。そしてこの失策は民間企業であれば、倒産、良くて役員・担当者総入れ替えとなるくらいの惨事となるだろう。が、国のこの政策の本当の意図が、米英の利益の為の手先となり、日本の生徒・学生に無駄な時間を使わせ、割り算や%の計算すらできない日本人を増やす、そして日本の国力を弱体化させ、相対的に米英の学力を高め、日本の労働者を先進国で現在最低レベルの賃金水準にふさわしい無能なレベルにする、というのなら、これほどの的を得た政策はないだろう。

ただ政府の政策に関わらず、日本人には大きなチャンスが待っている、ということでもある。前稿で見た圧倒的な品質と数の英語 MOOC が、日本語でも簡単に学べるようになるということでもあるし、それ以上に、そんなグローバルなプラットフォームに、（ここから非常に重要）世界各国からのローカルな知がダイレクトに大規模に流入してくる、またこちらからも発信できるということである。先にみたアメリカとスペインの子供たちのスカイプ授業のように、言語を超えて生の声を交換できるようになる、ということである。第 1 稿に書いた Minerva のような先端的な教育に日本語で参加できる可能性も出てくる。日本の硬直化した大学の提供する教育はますます魅力のないものに映るだろう。日本の大学の学位なんか小学校の時から眼中にない子供も多く出てくるだろう。世界レベルの競争に日本の大学は放り出されるのだ。

そして教員は世界的なステージでその教育力を評価されることとなる。日本の大学教員の圧倒的

大多数の、たいしたレベルの論文は書いていないけど教育はしています、という教員も世界レベルで評価されるようになってくるだろう。そして研究実績も教えるのも世界的なレベルのスター教員（例えば先に見たマイケル・サンデル教授）を多く有する花形大学（例えばハーバード大学）と、論文なんか書いてないけど出来ない学生の面倒は見ていますというような、世界レベルから見ればローカル地下アイドルの教員で揃えた地元密着型の大学（日本の大学の圧倒的大多数）に2極化してくるだろう。また世界的な花形大学のサテライト（補習校）としての日本の大学、そこで結果的に補習要員として存在していく教員も出てくるだろう（既にいくつかの大学でこの兆しは見えているが）。次稿では、いよいよそんな日本の高等教育業界が直面する新しい世界について考えていきたい。